

氏名(本籍)	沼田善子(東京都)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第2250号		
学位授与年月日	平成19年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	現代日本語とりたて詞の研究		
主査	筑波大学教授	Ph. D. (言語学)	竹沢幸一
副査	筑波大学教授	Ph. D. (言語学)	岡崎敏雄
副査	筑波大学教授	博士(文学)	湯澤質幸
副査	筑波大学助教授	Dr. phil. (言語学)	森芳樹

### 論文の内容の要旨

本論文は、日本語の「とりたて」に関する包括的研究の一環として、現代日本語の「とりたて詞」の分類と文法機能に焦点を当て、記述的観点から考察を行ったものである。

本論文で考察対象とされる語群(「も」「まで」「さえ」「すら」「だって」「でも」「だけ」「のみ」「ばかり」「しか」「こそ」「など/なぞ/なんぞ/なんか」「なんて」「くらい/ぐらい」「は」)のほとんどは、伝統的に副助詞・係助詞に分類されてきた要素であるが、実際には、その定義とともにそこに属する語群が諸説必ずしも一致せず、問題の多い文法範疇であった。また伝統的範疇分けへの批判から、それらに属する語群を再分類して「取立て助詞」といった新たな範疇がたてられることもあったが、そこでも定義や属する語彙項目に揺れが見られ、問題が残されてきた。さらに、「文中の何らかの要素をとりたてる」という機能的側面から見ると、上記の助詞に属する語群以外にも、そうした機能に関与する要素が存在しており、これまでの研究にはそうしたものまでも含めた総体的観点からの考察が欠如していた。

こうした中、本論文は、とりたてという文法機能を果たす中核的要素を範疇上、とりたて詞として切り出し、その統語的、意味的特徴を記述して、とりたて詞に属する語群がどのような内的体系をなすかを明らかにすると同時に、とりたて詞と境界を接する他範疇に属する語群との異同についても考察を加え、範疇間にもたがる関連性・連続性を捉えることを目指した研究である。

論文構成は以下のとおりである。

本論文は序章、終章を除いて、第1部、第2部の二部構成となっている。

研究の目的、考察の対象、論文の構成を述べる序章に続く第1部は、とりたて詞研究の総論にあたり、とりたて詞がどのような特徴と内部体系を備えた文法範疇なのかが示される。

まず第1章では、先行研究を通観し、その批判的検討を行うことで、著者が本論文でとる基本的な方向性を明確にする。

続く第2章では、とりたて詞の一般的な統語的特徴について考察し、とりたて詞が分布の自由性、任意性、連体文内性、非名詞性の4つの統語的特徴すべてを有する語であり、このことをもって他の文法範疇と弁別されることが主張される。

第3章では、とりたて詞の意味的特徴を考察し、その意味は原則として「自者」と「他者」、「主張」と「含み」、「肯定」と「否定」、「断定」と「想定」の4組8個の基本的特徴とその組み合わせによって体系的に記述できることが論じられる。さらに、第2,3章の考察を通し、とりたて詞に対して、文構成には直接関与しない任意の要素で、もっぱらとりたての機能を果たすものであるとの統語的特徴を指摘した上で、著者は意味的観点から次のような特徴づけを与える。すなわち、とりたて詞とは、まず文中に現れる何らかの要素を「自者」とし、加えて自者と範列的關係を持つ文中には明示されない要素を「他者」として対立させることにより、「自者」についての命題である「主張」と、「他者」について暗示される命題である「含み」を同時に示し、両者の論理的關係を表す語群である。また、その論理的關係は、「断定」と「想定」、「肯定」と「否定」のような対立する概念で表されることになる。

第4章では、とりたての焦点と作用域の決定方法が論じられる。まず、とりたての焦点、作用域の定義、および焦点、作用域となり得る文中の要素の範囲を明確にした後、とりたて詞によるとりたての焦点には、その文中の分布に基づき、直前焦点、後方移動焦点、前方移動焦点の3種類があることが示される。著者はさらに、とりたて詞の分布と作用域の關係についても考察し、とりたて詞の分布が基本的にはその作用域の先端かあるいはその末端を示すと主張する。

第5章では、とりたて詞と否定の作用域の広狭に関する解釈に着目し、主節中のとりたてと否定の解釈は、とりたて詞の種類によって、とりたての作用域が常に否定を含む「広作用域単独型」とその逆の「狭作用域単独型」、両方の場合がある「広作用域、狭作用域併存型」の3つがあること、また従属節内ではとりたてと否定の広狭の關係が変化する場合があることが述べられる。

第6章では、とりたて詞に属する語群が他の範疇として用いられる用法と、とりたて詞自体としての用法との間の比較が行われる。具体的には、「まで／だけ／ばかり／くらい」の形式副詞用法、「だけ／ばかり／くらい」の概数量を表す形式名詞用法、「まで」の格助詞・順序助詞用法、「など」の並列詞用法、「も」の形式副詞やその他の用法、「ばかり」のアスペクト詞用法、「だけだ／までだ」の助動詞用法と、それらがとりたて詞として使われた場合の範疇的相違と意味的連続性について、詳しい事実観察が提示される。

後半の第2部はとりたて詞各論である。本論文でとりたて詞とされる語のうち、第2部では、第1章で「も」、第2章で「まで」、第3章で「さえ」と「すら」、第4章で「だけ」と「のみ」、第5章で「ばかり」、第6章で「しか」、第7章で「こそ」、そして第8章で「など」「なんか」「なんぞ」「なぞ」について順にとりあげ、それぞれが持つ一般的特徴と各語に個別に見られる特徴が示される。加えて、ともに「意外」の意味を持つ「まで」と「さえ」、「限定」の意味を持つ「だけ」「のみ」「ばかり」「しか」等の類義語間の相違点についても詳述される。

第9章では、第8章までで考察したとりたて詞の意味的特徴をまとめ、とりたて詞に属する各語が体系化される。

終章では、本論文の考察の全体的なまとめとともに、今後の研究の方向性が示される。

## 審査の結果の要旨

本論文は、現代日本語のとりたて詞の統語と意味に関する包括的な研究であり、著者は、第1部の総論においてとりたて詞全体としての体系性を、第2部の各論では、第1部で示された体系性に照らしてそれぞれのとりたて詞が個別に有する特徴を、豊富で良質なデータと綿密な事実分析によって描き出している。

本論文の日本語文法研究に対する最も重要な貢献は、伝統的に副助詞と係助詞とに分類されてきた語群をとりたて詞という一つの文法範疇として括り、その統語的、意味的特徴を明らかにするとともに、そこに含まれる語彙要素間の内的体系性の提示と他範疇の関連語彙との比較によって、逆に単一の範疇としてのとり

たて詞の統一性をあぶり出した点にある。特に、とりたて詞に属する語が分布の自由性、任意性、連体文内性、非名詞性の4つの形式的基準に基づいて統語的に同定され、そうして選出された語の意味が、「自者」と「他者」、「主張」と「含み」、「肯定」と「否定」、「断定」と「想定」という4組の意味的特徴の組み合わせによって記述できるとの主張は、本論文の骨格をなす部分であり、それを基軸に個々のとりたて詞の異同および関連性がきれいに整理・体系化されている。また、それらが他範疇として転用された用法と比較することにより、日本語文法におけるとりたて詞自体の性格がなおいっそう明確な形で提示されている。

さらに、意味解釈に関して作用域を必要とする文法要素としてのとりたて詞の特性が焦点解釈の決定と否定辞との相互作用の二側面から追求されており、前者には直前焦点、後方移動焦点、前方移動焦点の3種類が、また後者には広作用域単独型、狭作用域単独型、広狭作用域併存型の3つのタイプが存在するという非常に興味深い記述的一般化が導出されている。

本論文のこうした成果は、徹底した事実観察に基づく堅固な記述的基盤に立った研究から産み出されたものであり、今後長きにわたってこの分野に関するいかなる種類のアプローチにおいても必ず言及されるべき重要な基礎研究として位置づけられることになるものと予想される。

他方、本論文がまさに日本語とりたて詞の全体像を追い求めた野心的研究であるがゆえに、そこから新たな課題も大小いろいろなレベルで生じてくる。ここでの成果をもとにさらに深められるべき重要な課題としては、特に次のようなものが挙げられる。

1. 統語論、意味論、さらには語用論といった理論的研究に対してどのような示唆および洞察を与えるのか？
2. 現代日本語の観察から得られた概念、基準、記述的一般化は、日本語の通時的な考察や方言間の比較、さらには他言語の関連現象の分析に対してどの程度の有効性を持つのか？

今後こうした大きな視野に立った研究がさらに押し進められることによって、本論文中に提示された著者の緻密な記述的考察に対する評価がいっそう高まることは予想に難くない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。